

黒袴台遺跡

—西浦・黒袴土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査—
栃木県佐野市黒袴町

佐野市教育委員会

栃木県佐野市田沼町974-1 Tel.0283-61-1177
(公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
栃木県下野市紫 474 Tel.0285-44-8441

1 はじめに

三疊山西側には、かつては越名沼が広がり、それを利用した人間の活動が古くから行われていたと考えられます。平成9年には佐野市教育委員会が西浦町にあるムジナ塚遺跡、平成9・10年には埋蔵文化財センターがその北にあるヘビ塚遺跡を調査しました。

黒袴台遺跡は、平成9・10年に埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われ、遺跡の南半分の様子が明らかになりました。今回、北半分の地区を発掘調査することとなり、遺跡全体を調査できることとなりました。ひとつの遺跡全体を調査できることはまれですから、大きな成果が期待できます。現在調査は進行中ですが、その成果の一部を発表することといたします。

2 調査の成果

(1) 縄文時代について

- ① 黒袴台遺跡では、縄文時代の遺物を含んだ地層（包含層）が全体に広がっています。最も古いものとしては、草創期（今から約 15,000 - 12,000 年前）の尖頭器（槍の先）が発見されています。特に多いのは、縄文時代早期の遺物です。早期は今から約 12,000 年前から 7,000 年前の時代で、栃木県では竪穴建物跡の発見が少なく、遺物の大半が包含層から発見されます。多くの土器は底が尖っています。黒袴台遺跡の縄文時代早期の土器は、栃木県から茨城県北・中部にかけて固有に分布する「出流原式」と呼ばれるもので、約 8,500 年前のものと考えられています。出流原式土器はこれまでの出土例では一遺跡でせいぜい数十片ほどでしたが、黒袴台遺跡では数百点発見されており、大規模な集落であったと考えられます。
- ② 石器には打製石斧、磨製石斧、片刃石器、石鏃がみられます。磨製石斧は伐採、木材加工用の道具ですが、打製石斧は、斧ではなく、土掘り具として使われたようです。片刃石器も打製石斧と同様の使いみちが考えられますが、片側にだけ加工してあるのが特徴で、黒袴台遺跡では打製石斧より古く、多数出土しています。石鏃はいわゆる「矢じり」で、弓矢として狩りに使われました。黒袴台遺跡では、地元の石であるチャートの他に、黒曜石（黒いガラスのような石）でできた石鏃が発見されています。黒曜石は、矢板市高原山、長野県和田峠、伊豆七島の神津島などで産出するもので、交易などで遺跡に持ち込まれたものです。しかも黒袴台遺跡では黒曜石の細かい破片も多数発見されていることから、持ち込まれた石材を使って、石器を製作していたと考えられます。遠隔地の石材が多量に持ち込まれた黒袴台遺跡は、拠点となるような大きなムラであったことが想定できます。
- ③ 縄文時代前期（約 7,000 - 5,500 年前）の竪穴建物跡や土器も発見されています。前期の竪穴建物跡は黒袴台遺跡だけでなく、越名沼を囲む地域で多数発見されており、この地域に集落が集中していたことが判っています。今回の調査では、前期の土坑（穴）から特殊な石匙が出土しました。石匙は、つまみがついていますが、さじ（スプーン）ではなく、動物の解体、皮剥ぎに使った石器です。先端がとがって、槍にも見える形状で、山形県地方に分布する珪質頁岩で作られたものを押出型石匙と呼んでいます。黒曜石と同様、交易によって山形県地方から持ち込まれたと考えられます。石匙が出土した土坑は小さく、墓穴と考え

られます。遠い地方の石材で作られた石匙を持って埋葬された死者は、副葬品を持たない墓に葬られた死者より地位が高かった可能性があります。生前、狩りでリーダー的役割を果たしていたのかもしれませんが。似たような事例は宇都宮市根古谷台遺跡でも見られます。

- ④ 時期は不明ですが、縄文時代のものと思われる陥し穴状土坑がいくつか発見されています。これらは、動物を追い込んだり、待ち伏せして捕獲するための穴で、底面に、穴に落ちた動物を傷つけるための棒杭を立てた小さな穴が見つかったものもあります。陥し穴状土坑が作られた時代には黒袴台遺跡が狩り場であったことを示しています。

(2) 古墳時代のムラについて

- ① 平成9・10年の調査では、古墳時代の竪穴建物跡は、前期が3軒、中期が22軒、後期が59軒見つかっています。今回の調査では古墳時代後期の竪穴建物跡が5軒あります。
- ② 古墳時代後期の竪穴建物跡は正方形で四隅に柱穴があり、北側か東側の壁際にカマドがあります。カマドは粘土で作られますが、使わなくなった土器を骨組みとして使用しているものがあります。1軒からは、魚捕りの網のおもりが多数出土しました。他には見られないほど大型であることが特徴で、当時の漁業を復元する手がかりになるものです。

(3) 古墳時代の墓について

- ① 古墳時代前期(約1,700年前)には方形に溝をめぐるした墓(方墳、方形周溝墓)が作られます。今回発見された墓(SZ-026)は、一辺5.6mの方形に巡る溝を持ち、溝の中からは土器が出土されています。壺が二つ、口を合わせた形で発見されており、中に遺骨をいれた、壺棺墓と考えられます。お墓本体の遺体を納めた部分は既に失われていました。黒袴台遺跡ではこれまで6基の古墳時代前期の墓が発見されていましたが、今回の発見でさらに1基増えて、全部で7基あることが判明しました。同じ時期には対岸に、全長44.4mの前方後方墳である松山古墳と多数の方墳が造られていることが判明しています。それに比べると黒袴台遺跡の前期の墳墓群は小規模です。この違いは、当時の社会の中でのそれぞれの地域集団の違いを反映していると考えられます。
- ② 古墳時代後期(約1,500~1,400年前)には横穴式石室を作り付けた古墳が多数つくられました。前回の調査では30基、今回の調査で新たに9基発見されました。これらのうち、古墳の形が判明したものは全て円墳でした。南側のムジナ塚遺跡では前方後円墳が発見されていますので、同じ時期の古墳群でもその性格が異なっていることが分かります。黒袴台遺跡のように同じ形の小さな古墳が集中してつくられるものを「群集墳」と呼んでいます。群集墳からは鉄鏃、金銅製耳環、ガラス玉が出土しました。

古墳時代は、4世紀から7世紀までの約300年間つづきましたが、国家が形成される、社会の転換期にあたります。黒袴台遺跡ではムラができたり、墳墓が作られたり、時代の移り変わりと共に大きく変化していたことが分かります。

(4) 平安時代のムラについて

平成9・10年の調査では、平安時代の竪穴建物跡は39軒見つかっています。竪穴建物跡は、古墳時代後期のものと比べると、柱穴がないなど、やや簡略化した構造をとるものが多いです。カマドは粘土で作られますが、使われなかった瓦を骨組みとして使用しているものがあります。これは三叢山麓に多数の窯があるためです。そこで作られた瓦は本来、国府や国分寺で使われるために作られたものですが、不良品は付近のムラで再利用されたと考えられます。

(5) 中世の墓地について

中世(室町時代)の遺構は、土坑、溝、井戸があります。これらは全体で墓地を形成してい

たと考えられます。出土した墓は、四角い穴を掘ったものや火葬した骨が出土した円形のものがあります。中には古銭が出土したものもあります。中世には古文書が残され、武将やお城のことがいろいろ分かっていますが、このように古文書に残らないことも発掘によって明らかにすることができます。

3 まとめ

今回の調査によって、前回調査した黒袴台遺跡の北側の部分の状況が明らかになりました。今後、黒袴台遺跡の全体像を明らかにしていきたいと考えています。



佐野市都市整備地区

黒袴台遺跡および周辺の遺跡

(平成6年5月19日撮影)



縄文時代早期の土器（出流原式）



縄文時代の片刃石器



縄文時代の石鏃（矢じり）



縄文時代草創期の有舌尖頭器（槍の先）



古墳時代前期の方墳



方墳から出土した土器（中に遺骨が入られた）



古墳時代後期の横穴式石室（写真上が入口）



古墳時代の魚捕り網のおもり